

エラチオールベゴニアにおける観賞期間終了の判断基準

長嶋 圭¹⁾・米倉基裕¹⁾・堀田真紀子²⁾・池内 都³⁾・山口徳之¹⁾

摘要：愛知県の代表的な鉢花の一つであるエラチオールベゴニア 2 品種について、市場出荷時点からの開花数、蕾数、枯花数、葉数、黄化葉数、枯葉数、草丈及び株幅の推移と観賞期間との関係を調査した。

その結果、イローナ系、B系両品種ともに、開花数と蕾数の合計が調査開始時の数より減少すると観賞価値がなくなると判断された。

このことから、消費者が購入した時点での開花数と蕾数の合計を下回った時点をも、エラチオールベゴニアの観賞期間終了の基準とすることが妥当であると考えられた。

キーワード：鉢花、エラチオールベゴニア、観賞価値、日持ち

緒言

エラチオールベゴニアは、年末から母の日にかけての贈答用を主体に生産されている鉢花である。

愛知県におけるエラチオールベゴニアの生産状況は、愛西市、あま市、海部郡蟹江町、田原市が主な産地で、ベゴニア類として産出額2億5千万円、作付面積3.9 ha、出荷量54.4万鉢となっており¹⁾、主要な鉢花の一つである。

平成27年産の国内における鉢花を始めとする鉢物全体の生産状況は、作付面積1732 ha、出荷量2億2960万鉢で、5年前の平成22年産と比べて作付面積は93.2%、出荷量は87.9%と減少傾向にあり、本県も同様の傾向となっている^{2,3)}。また、国内における鉢物の消費量も、減少傾向にある⁴⁾。

このような中で鉢花の生産振興を図るためには、生産性の向上等の対策を講じるとともに、高品質な商品を提供して需要を拡大する必要がある。しかし、鉢花は種類が多いうえ用途も様々であることから、品質に関する基準は明確になっていない。特に日持ち性に関しては、消費者が購入した後の環境や管理方法により観賞期間が大きく異なることから、出荷後の姿と観賞期間の関係を明らかにした日持ちの評価基準を設けることが日持ち性向上の試験研究を進める上で課題となっている。

そうした状況を踏まえ、国産花きの消費拡大につながる日持ち性向上対策に関する施策が講じられており⁵⁾、今回、実証研究の一つとして、エラチオールベゴニアの観

賞期間終了の基準について検討を行ったので、報告する。

材料及び方法

豊明花き株式会社から花形や草姿が異なる2品種のエラチオールベゴニアとしてイローナ系の「パティック」及びB系の「ボリアス」の5号鉢をそれぞれ購入し、供試した。イローナ系は、生育が旺盛で分枝性に優れ、花は小輪多花である。B系は、伸長しやすい高性で、花が大きい特徴がある。

花き研究室調査棟生態実験室において、2015年10月23日から2016年1月6日まで日持ち調査を行った。調査中、実験室内の温度は20℃に設定し、湿度の管理は行わなかった。照明は光源に蛍光灯を用いた。12時間照明で、照度は1000 lxとした。供試数は1品種当たり10鉢とした。

調査項目は、開花数、蕾数、枯花数、葉数、黄化葉数、枯葉数、草丈、株幅(長径・短径)とした。調査中に傷みや枯死が確認された花、蕾、葉は、その都度株から除去した。

灌水管理は、2日に1回1鉢当たり100 mLを与えた。施肥は無施肥とした。

観賞期間の終了は、調査が終了した段階で各調査日またはその前後に撮影した写真で、花き市場関係者(豊明花き株式会社)に提示し、商品価値が無くなった時点の判断を得た。

本研究は、農林水産省平成27年度産地活性化総合対策事業のうち国産花きイノベーション推進事業で実施し、平成28年度園芸学会東海支部研究発表会(2016年10月)において発表した。

¹⁾園芸研究部 ²⁾園芸研究部(現企画普及部) ³⁾企画普及部

(2017. 9. 13 受理)

結果及び考察

1 エラチオールベゴニア「パティック」の 観賞期間中の 花数等の推移と観賞終了の判断基準

開花数は、10日目から18日目にかけて急激に増加し、26日目に調査開始時の5.1倍に達してピークを迎え、以後減少した。

蕾数は、開花数の急増に伴って10日目から18日目の間で大きく減少し、その後は緩やかに減少した。

枯花数は、10日目以降に増加し、54日目に最も多くなった(図1)。

葉数は、10日目から減少し、46日目以降は横ばいとなり、最終調査では調査開始時の86.4%を維持していた(図2)。

草丈は、18日目までは変化がなく、その後はやや増加した。株幅も同様に増加の傾向が見られたが、その程度は大きくなかった(図3)。

一般的に鉢花では、花・葉ともに商品性を構成する

要素として評価されており、エラチオールベゴニアでも同様に、その鮮やかな花と肉厚で大きな葉を観賞の対象としている。

生産者は、市場で適正な評価が得られるよう、観賞可能となった花と葉の状態の鉢花を出荷しているため、花や葉が出荷時点の状態を大きく下回らない間は観賞価値があると考えられる。

「パティック」の場合、葉数はあまり減少せず、草丈、株幅には目立った変化はなかったことから、花数と蕾数の総数が観賞価値を判断する指標になると考えられる。

調査開始時の開花数と蕾数の合計を100とし、日数の経過に伴う指数の推移をグラフ化したところ、「パティック」は、調査開始時の状態を49日間下回ることがなかった(図4)。

日数の経過に伴う指数の推移(図4)と調査開始から終了までの間の株の状態を記録した写真(図5)により、花き市場関係者に観賞価値の有無について意見を求めた結果、49日目以降は先端の蕾のみが残り、花茎が間延びして花数が極端に少なくなった状態となることから観賞価

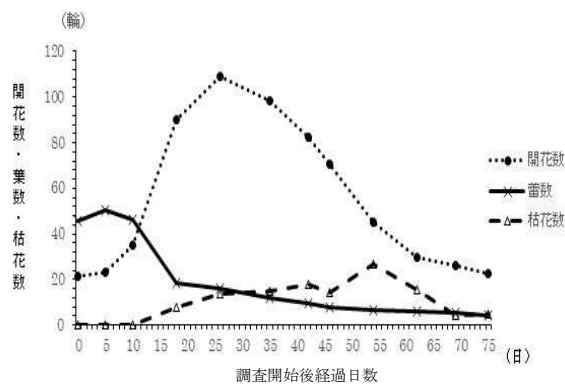


図1 エラチオールベゴニア「パティック」における開花数・蕾数・枯花数の推移

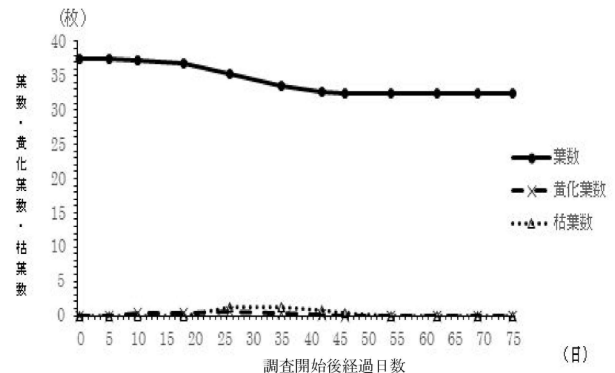


図2 エラチオールベゴニア「パティック」における葉数・黄化葉数・枯葉数の推移

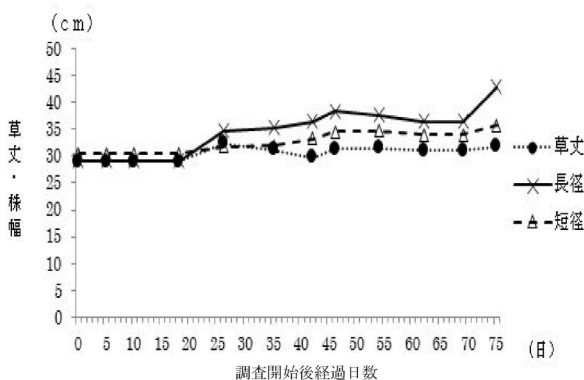


図3 エラチオールベゴニア「パティック」における草丈・株幅の推移

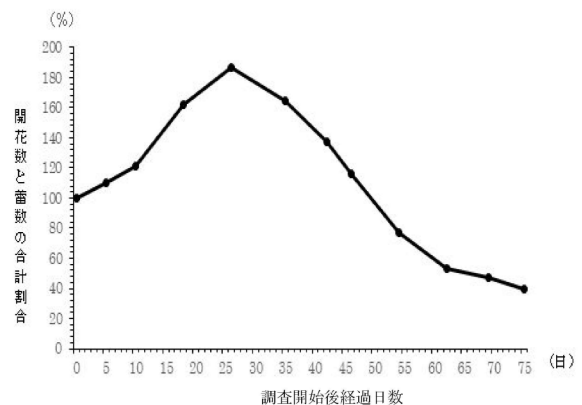


図4 エラチオールベゴニア「パティック」における開花数と蕾数の合計割合の推移

値がないと判断された。

このことから、「パティック」については、消費者が購入した時点での開花数と蕾数の合計を下回った時点を観賞期間終了の基準にできると考えられた。

2 エラチオールベゴニア「ボリアス」の観賞期間中の花数等の推移と観賞終了の判断基準

開花数は、調査開始から35日目まで増加してピークを迎え、調査開始時の4.8倍に達し、その後減少した。

蕾数は、開花数の増加に伴って減少し、42日目には0輪となった。

枯花数は、5日目から徐々に増加し、54日目にピークを迎えた(図6)。

葉数は、あまり減少せず、最終調査でも調査開始時の91.1%を維持した(図7)。

草丈は、69日目までは大きな変化はなかったが、その後6.4cm増加した。

株幅は、18日目以降増加したが、程度は大きくなかった(図8)。

調査開始時の開花数と蕾数の合計を100とし、指数の推移をグラフ化したところ、「ボリアス」は48日間調査開

始時の状態を下回ることがなかった(図9)。

「パティック」と同様、日数の経過に伴う指数の推移(図9)と調査開始から終了までの間の株の状態を記録した写真(図10)を提示し、花き市場関係者に観賞価値の有無について意見を求めたところ、花色の白くなった部分が多い花は老化が進んだもので、この状態が見られた直後には落花すると想定されることから48日目以降は観賞価値が低下していると判断された。

こうした結果から、「ボリアス」も「パティック」と同様に、花数と蕾数の合計により観賞価値の有無を明確に判断することができると考えられた。

以上のことにより、「ボリアス」も5号鉢では、消費者が購入した時点での開花数と蕾数の合計を下回った時点を、観賞期間終了の基準にすることが妥当であり、エラチオールベゴニアではタイプが異なっても同じ基準が適用できるものと考えられた。

謝辞：試験材料の準備、観賞期間終了時の判断について、豊明花き株式会社の協力を受けた。ここに記して厚く感謝の意を表する。



図5 エラチオールベゴニア「パティック」の株の状態

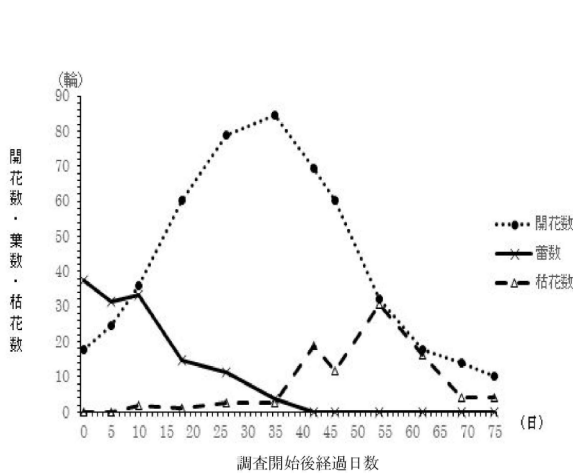


図6 エラチオールベゴニア「ボリアス」における開花数・蕾数・枯花数の推移

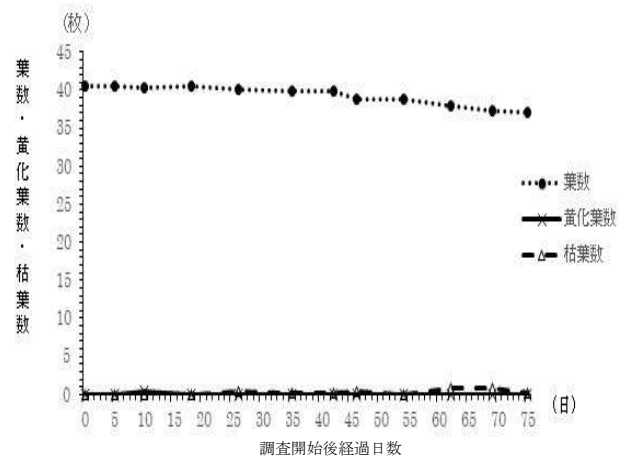


図7 エラチオールベゴニア「ボリアス」における葉数・黄化葉数・枯葉数の推移

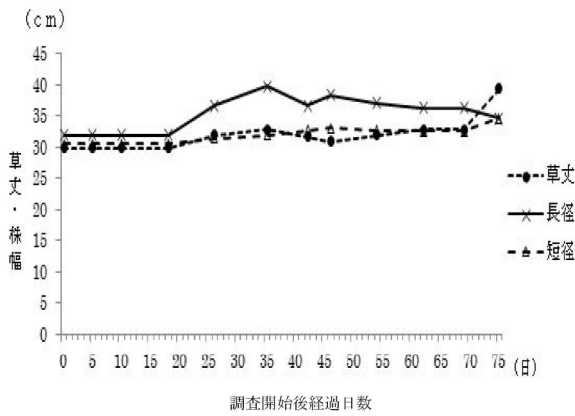


図8 エラチオールベゴニア「ボリアス」における草丈・株幅の推移

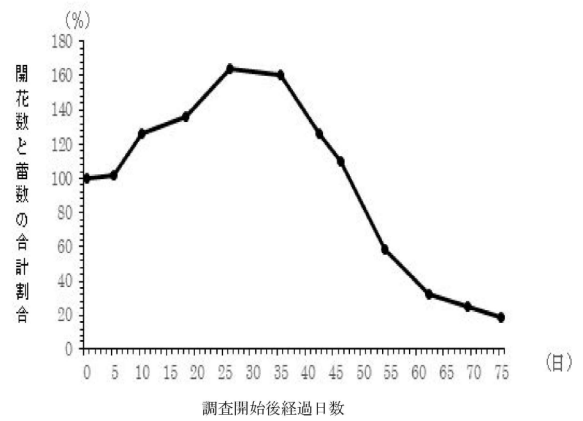


図9 エラチオールベゴニア「ボリアス」における開花数と蕾数の合計割合の推移



図10 エラチオールベゴニア「ボリアス」の株の状態

引用文献

1. 愛知県農林水産部園芸農産課. 平成27年産花き生産実績 (2017)
2. 農林水産省統計部. 平成27年産花きの作付け(収穫)面積及び出荷量. 農林水産統計情報総合データベース (2016)
3. 農林水産省統計部. 平成22年産花きの作付け(収穫)面積及び出荷量. 農林水産統計情報総合データベース (2011)
4. 総務省統計局. 家計調査年報(家計収支編)1世帯当たりの品目別支出金額(総世帯) (2016)
5. MPSジャパン. 平成27年度産地活性化総合対策事業のうち国産花きイノベーション推進事業 花き日持ち性向上対策実証事業報告書 (2016)